

「日本のことば遊び」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

1、数え歌

・お手玉歌

- 一番はじめが一宮
- 二また日光東照宮
- 三また讃岐の金毘羅さん
- 四また信濃の善光寺
- 五つ出雲の大社
- 六つ村々鎮守様
- 七つ成田の不動様
- 八つ八幡の八幡宮
- 九つ高野の弘法様
- 十で東京浅草寺

*別バージョン

- 一番はじめは一の宮
- 二は日光の東照宮
- 三は佐倉の宗五郎
- 四はまた信濃の善光寺
- 五は出雲の大社
- 六つは村々鎮守様
- 七つ成田の不動様
- 八つ八幡の八幡宮
- 九つ高野の弘法様
- 十は東京招魂社

・京都の東西の通りの数え歌

- まるたけえべすにおしおいけ
- 丸太町・竹屋町・夷川・二条・押小路・御池
- あねさんろつかくたこにしき
- 姉小路・三条・六角・蛸薬師・錦
- しあやぶつたかまつまんごじょう
- 四条・綾小路・仏光寺・高辻・松原・万寿寺・五条
- せつたちやらちやらつおのたな
- 雪駄(鍵屋)・魚の棚
- ろくじょうさんてつとおりすぎ
- 六条・三哲
- ひつちようこえればはつくじょう
- 七条・八条・九条
- じゅつじょうとつじでとどめさず
- 十条・東寺

*別バージョン

- 坊さん頭は丸太町 づるつとすべつて竹屋町
- 水の流れは夷川 二条で買った生薬を
- ただでやるのは押小路 御池で出逢った姉三に
- 六銭もろつて蛸買つて 錦で落として四かられて
- 綾まつたけど仏々と 高がしれてる松どしたる

*東西の主な通り(北から)

- 丸太町通・竹屋町通・夷川通・二条通・押小路通・御池通・姉小路通・三条通・六角通・蛸薬師通・錦小路通・四条通・綾小路通・仏光寺通・高辻通・松原通・万寿寺通・五条通・雪駄屋町通(鍵屋町通)・魚棚通・六条通・花屋町通・七条通・八条通・九条通・十条通

*「雪駄屋町通」は現在の楊梅通。「ちやらちやら」は鍵屋町通を指すという

説もある。「魚の棚町通」は現在の六条通。「三哲」は現在の塩小路通のこと、場所は七条通と八条通との間。

2、尻取り歌

- ・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは屋上、屋上は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

*別バージョン1

- ・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蛙、蛙は青い、青いは葉っぱ、葉っぱは揺れる、揺れるは地震、地震は怖い、怖いはおばけ、おばけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

*別バージョン2(古そう。すみません。ちょっと汚い)

- ・いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は赤い、赤いはホウツキ、ホウツキは鳴るよ、鳴るのはおなら、おならはくさい、くさいはうんこ、うんこは黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは十二階

「十二階」は、浅草公園にあった凌雲閣の俗称。展望台兼レストランで、明治二三年(一八九〇)完成。東京一の高さを誇る建物として連日見物客でにぎわった。大正二二年(一九三三)の関東大震災で、八階部分から折れた。

3、なぞ、無理問答など

- ・上は大水、下は大火事、何だ? (なぞなぞ)
- ・ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さんと解く その心は? (三段なぞ)
- ・一枚でも煎餅とはこれ如何に 一個でも饅頭と言うが如し (無理問答)
- ・下戸にご飯(猫に小判) (地口)
- ・恐れ入谷の鬼子母神 その手は桑名の焼蛤 (無駄口)

4、回文

a 新聞紙(しんぶんし)、八百屋(やおや)

竹屋が焼けた(たけやがやけた)、磨かめ鏡(みがかぬかがみ)
 ダンスが済んだ(だんすがすんだ)、私負けましたわ(わたしまけましたわ)
 たちまち勝ちました。阪神は、たちまち勝ちました

(たちまちかちました。はんしんは、たちまちかちました)《自作・お粗末》

b 手袋(てぶくろ) 六撲(ろくぶて)

わたしカスミ草(わたしかすみそう)

嘘、見透かしたわ(うそみすかしたわ)

気付け!、細部に(きづけさいぶに) にぶい酒好き(にぶいさけずき)
 気付け!、細部に(きづけさいぶに) にぶい酒好き(にぶいさけずき)

- c 山本山、日曜日、水道水、中継中、馬車馬、大阪大、三笑亭笑三、三遊亭遊三、国外日本人本日外国《自作・お粗末》
- d 赤坂(AKASAKA)

古典の回文

むら草に草の名はもし備はらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

(『奥義抄』「草花を詠む古歌」)

* 『奥義抄』は平安後期の歌論書。

長き夜の十(あるいは遠か)の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな

(なかきよのおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな)

* 江戸時代に、よい初夢を見るように枕の下に入れた宝船の絵に書いてあった歌。この歌は中国で万曆二十年(一五九二)刊行の『日本風土記』にも見える。

身の留守に来ては折り取るこの花は残る鳥をば敵にするのみ(『吾吟我集』)

* 『吾吟我集』は、江戸初期の狂歌集。

目をとめよ梅かながめむ夜目遠目(『毛吹草』「廻文之発句」)

* 『毛吹草』は、正保二年(一六四五)刊行の俳書。

浦和で蒔いた、ははは、と母は大麻で笑う



『またたび浴びたタマ』村上春樹・文、友沢ミミヨ・画。文藝春秋。
 平成二二年八月

5、早口ことば

・生麦生米生卵

(namamugi namagome namatamago)

・バスガス爆発(basugasubakuhatu)

6、文字遊び

・吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ(古今集二四九)
(吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うのだろ。)

・戀(恋)……いと(糸)し、いと(糸)しと言つ心

・櫻(桜)……二階(貝貝)の女が氣(木)に掛かる

・八十八歳を米寿、七十七歳を喜寿(喜の字の崩し字から)、九十歳を卒寿(卒の字の崩し字から)、九十九歳を白寿(百に一画足りない)

7、懸詞(掛詞)

波が立つ

・風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆるむ(古今集九九四)

龍田山(地名)

8、折句

・むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえつなぎ物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとり

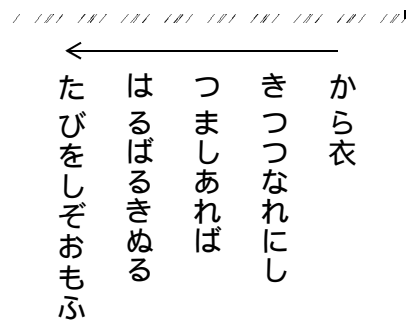
の木の蔭に下りゐて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを

見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上(かみ)にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。(伊勢物語 第九段)



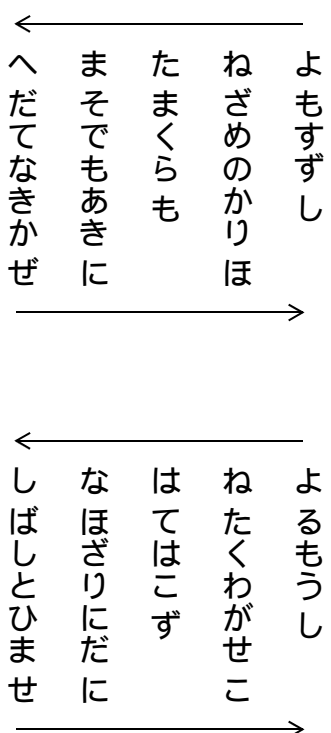
9、沓冠の歌

『続草庵集』(南北朝時代の歌人、頓阿の歌集)に見える兼好との贈答歌

・夜も涼し寢覚めの仮庵手枕も真袖も秋に隔てなき風(兼好)

夜も涼しい。目が覚めたこの仮の廬では、腕枕も衣の袖も変わらない秋風が吹いて行く。

・夜も憂しねたく我が背子果ては来ずなほざりにだにしばし訪ひませ(頓阿)
夜もつらい。憎たらしくもあなたはついに来ない。たとえかりそめの気持ちでも良いから、しばらく訪ねてきてください。



*兼好は「米たまへ、銭も欲し」と頓阿に無心し、頓阿は「米はなし、銭少し」と返している。句頭の連続だけでなく、句末の連続にも意味を持たせている

歌を「沓冠の歌」という。

10、「いろは歌」の類

あめつち

・あめつちほしそらやまかはみなたにくもきりむろこけひといぬうへすゑゆわ
さるおふせよえのえをなれぬて（四八字）

・天地星空山川峰谷雲霧至苔人犬上末硫黄猿生ふせよ榎の枝を慣れ居て

*「えのえ」と「え」が重複しているのは、平安初期にはア行のエとヤ行の
エとの間に音韻の別があつたから。「榎」のエはア行、「枝」のエはヤ行。

*「あめつち」で始まるのは、『千字文』が「天地玄黄」で始まるのに倣つ
たものと考えられている。

たぬに

・たぬにいでなつむわれをぞきみめすとあさりおひゆくやましろのつちゑ入る
こらもほせよえふねかけぬ（四七字）

・田居に出で、菜摘む我をぞ君召すと、漁り追ひ行く山城のつち酔へる子等、
藻葉干せよ、得船繫けぬ

いろは

・いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむつぬのおくやまけふこえ
てあさきゆめみしゑひもせす（四七字）

・色は匂へど 散りぬるを 我が世たれぞ 常ならむ 有為の奥山 今日越え
て 浅き夢見じ 酔ひもせず

*「いろは歌」の全文は承暦三年（一〇七九）の『金光明最勝王經音義』
に万葉仮名で書かれているのが現存最古

とりなくこゑす

・とりなくこゑすゆめさませみよあけわたるひんがしをそらいろはえておきつ
べにほふねむれぬもやのうち（四八字）「ん」を含む

・鳥啼く声す、夢覚ませ、見よ明け渡る、東を、空色栄えて沖つ辺に、帆船群
れぬ、露のうち

* 明治三十六年に、『万朝報』（黒岩涙香が主宰する新聞）で募集し、その
第一位になつたもの。埼玉県埼玉県の坂本百次郎氏作。